

## 王羲之と周撫

佐藤利行

### はじめに

東晋の王羲之（三〇三～三六一）は、世に「書聖」と呼ばれ、その名を知られている。今、近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館書店）の「王羲之」の項を見れば、次のように説明されている。

おうぎし「王羲之」三二一～三七九。東晋の琅邪臨沂（山東省）の人。字は逸少。元帝のとき、右軍將軍・会稽内史となり、世に王右軍と称せられる。王導の従弟の子で、父の王曠は淮南太守となった。永和九年（三五三）三月、会稽山陰の蘭亭に、当時の名士、謝安・謝万・孫綽など四十一人を招いて、修禊を行い、流觴曲水の宴を催したのが有名で、席上詩序を作って胸懷を述べたものに蘭亭集序がある。叔父の王廙について書画を学び、詩書に長じて草書隸書は古今に冠絶し、蘭亭集序の行書、樂毅論の楷

書、十七帖の草書は、特に有名である。没して金紫光祿大夫、常侍の官を加えられたが、子供たちが父の遺志によって固辞した。

子に、玄之・凝之・肃之・徽之・操之・献之の七人があり、中でも献之が有名で、父とともに二王の称がある。孝武帝の太元四年没。年五十九。なお生没年には諸説があり、一説に三〇三（西晋太安二）～三六一（升平五）とあり、また一説に三〇七（永嘉元年）～三六五（興寧三）とある。

ここにもあるように、王羲之は草書・隸書に巧みであり草書で書かれた「十七帖」は、今日まで書を習う者の手本となっている。「十七帖」については、例えば藤原楚水の「書道名蹟基本叢書」『十七帖』附録（三省堂）では、次のように説明されている。

十七帖については右軍書記に、これ烜赫たる著名の帖なりといひ、東觀餘論に書中の龍なりと評するなど、歴代右軍書中の劇蹟

を以て称せられ、その書の妙は現にまた吾々が見て知る如く草書の神品である。この十七帖が如何にしてできたかという、むかし唐の太宗はいたく王右軍父子の書を好まれ、ひろく二王の書を天下に求めた。このとき集った大王の書が三千紙あった。これを分類表装して各一丈二尺の巻に仕立てさせ、又蘭亭叙の例にならって虞世南、褚庭誨等に命じて臨搨せしめ、弘文館の子弟に与えて、習字の手本に供せしめた。これが所謂館本である。石本は即ちこの搨本から入石したものであるが、宋以後非常に多くの翻刻本ができた。（中略）十七帖には宋拓の精本が伝わっているから、王羲之の草書の真面目を見ようとすれば十七帖を外にしては求めがたいともいえよう。

十七帖の中に収めた尺牘は、古から羲之が周撫に与えたものであるといわれる。中には明らかに周撫に与えたものでないと認め得べきものもあり、恐らく全部が全部、周撫に与えたものではないであろうが、少なくともその中の二十数通は周撫にあてたものに相違あるまい。周撫は訪の子で字を道和といい、永和間、益州刺史となり蜀寇を破った功を以て建成公に封せられ、征西督護、鎮西將軍に累遷し官にあること数十年、恵政あり、卒して蜀人之を廟祀した。尚おこの法帖を十七帖というのは、その初めの都司馬帖の書き出しに十七日先書とあるのをとってこの帖名としたもので別に深い意味はない。

ここで指摘されているように、今日まで伝えられている王羲之の「十七帖」は親しい人に宛てた書翰であり、その相手が周撫なる人物であると言われている。本稿では、これら羲之の書翰を通して王羲之と周撫との関わりについて見て行きたいと思う。

### 周撫について

先に挙げた藤原楚水氏の解説の中にもあったように、周撫は周訪（字は士達）の子で、本伝は『晋書』巻五十八にある。

撫字道和。強毅有父風、而將御不及。元帝辟為丞相掾。父喪去官。服闋襲爵、除鷹揚將軍、太武昌守。王敦命為從事中郎、與鄧嶽俱為敦爪牙。甘卓遇害、敦以撫為沔北諸軍事、南中郎將、鎮沔中。及敦作逆、撫領二千人從之。敦敗、撫與嶽俱亡走。撫弟光將資遺其兄、而陰欲取嶽。嶽怒曰、「我與伯山同亡。何不先斬我」。會嶽至、撫出門遙謂之曰、「何不速去。今骨肉尚欲相危、況他人乎」。嶽迴船而走、撫遂共入西陽蠻中。蠻酋向蠶納之。

初嶽為西陽、欲伐諸蠻。及是諸蠻皆怨、將殺之。蠶不聽曰、「鄧府君窮來歸我。我何忍殺之」。由是俱得免。明年、詔原敦党。嶽撫詣闕請罪、有詔禁錮之。

咸和初、司徒王導以撫為從事中郎、出為寧遠將軍、江夏相。蘇峻作逆、率所領從温嶠討之。峻平、遷監沔北軍事、南

中郎將、鎮襄陽。石勒將敦敬率騎攻撫。撫不能守、率所領奔于武昌、坐免官。尋遷振威將軍、豫章太守、後代母丘奧監巴東諸軍事、益州刺史、假節、將軍如故。尋進征虜將軍、加督寧州諸軍事。

永和初、桓温征蜀、進撫督梁州之漢中巴西梓潼陰平四郡軍事、鎮彭模。撫擊破蜀餘寇隗文、鄧定等、斬偽尚書僕射王誓、平南將軍王潤、以功遷平西將軍。隗文、鄧定等復反、立范賢子賁為帝。初、賢為李雄國師、以左道惑百姓、人多事之。賁遂有衆一萬。撫與龍驤將軍朱熹擊破斬之、以功進爵建城侯。

征西督護蕭敬文作亂、殺征虜將軍楊謹、扼涪城、自号益州牧。桓温使督護鄧遐助撫討之、不能拔、引退。温又令梁州刺史司馬勲等會撫伐之。敬文固守、自二月至于八月、乃出降。撫斬之、伝首京師。

升平中、進鎮西將軍。在州三十餘年、興寧三年卒。贈征西將軍、諡曰襄。子楚嗣。

撫、字は道和。強毅にして父の風有るも、而も將御は及ばず。元帝辟して丞相の掾と為す。父の喪に官を去る。服闋み爵を襲ひ、鷹揚將軍・太武昌守に除せらる。王敦命じて従事中郎と為し、鄧嶽と俱に敦の爪牙と為る。甘卓害に遇ひ、敦は撫を以て沔北諸軍事・南中郎將と為し、沔中に鎮せしむ。敦の逆を

作すに及び、撫は二千人を領して之に従ふ。敦敗れ、撫は嶽と俱に亡走す。撫の弟光は資を將て其の兄に遺して、陰かに嶽を取らんと欲す。嶽怒りて曰く、「我は伯山と同じに亡ばん。何ぞ先づ我を斬らざる」と。会たま嶽至り、撫は門を出でて遙かに之に謂ひて曰く、「何ぞ速かに去らざる。今、骨肉すら尚ほ相ひ危ふからんとす、況んや他人をや」と。嶽は船を迴して走に、撫は遂に共に西陽の蛮中に入る。蛮の酋向蠶は之を納る。

初め嶽は西陽を為め、諸蛮を伐たんと欲す。是に及んで諸蛮は皆な怨み、將に之を殺さんとす。蠶は聽さずして曰く、「鄧府君は窮し来たりて我に帰す。我何ぞ之を殺すに忍ばん」と。是に由りて俱に免るるを得たり。明年、詔して敦の党を原す。嶽・撫は闕に詣りて罪を請ふに、詔有りて之を禁錮す。

咸和の初め、司徒王導は撫を以て従事中郎と為し、出でて寧遠將軍・江夏の相と為る。蘇峻逆を作すや、領する所を率ゐて温嶠に従ひて之を討つ。峻の平ぐや、監沔北軍事・南中郎將に遷り、襄陽に鎮す。石勒の將郭敬は騎を率ゐて撫を攻む。撫は守る能はず、領する所を率ゐて武昌に奔り、坐して官を免ぜらる。尋いで振威將軍・豫章の太守に遷り、後に母丘奥に代はり監巴東諸軍事・益州刺史・假節となり、將軍は故の如し。尋いで征虜將軍に進められ、督寧州諸軍事を加へらる。

永和の初め、桓温は蜀を征し、撫を進めて梁州の漢中・巴西・梓潼・陰平四郡軍事を督せしめ、彭模に鎮す。撫は蜀の餘

寇隗文・鄧定等を撃破し、偽尚書僕射の王誓・平南將軍の王潤を斬り、功を以て平西將軍に遷る。隗文・鄧定等は復た反し、范賢の子賁を立てて帝と為す。初め、賢は李雄の国師と為り、左道を以て百姓を惑はし、人多く之に事ふ。賁遂に衆一萬有り。撫は龍驤將軍朱熹と撃破して之を斬り、功を以て爵を建城県公に進めらる。

征西督護の蕭敬文乱を為し、征虜將軍の楊謹を殺し、涪城に拠りて、自ら益州の牧と号す。桓温は督護の鄧遐をして撫を助けて之を討たしむるも、抜くこと能はずして、引退す。温は又た梁州刺史の司馬勲等をして撫に会して之を伐たしむ。敬文は固く守り、二月より八月に至るも、乃ち出でて降る。撫は之を斬り、首を京師に伝ふ。

升平中、鎮西將軍に進めらる。州に在ること三十餘年、興寧三年卒す。征西將軍を贈られ、謚して襄と曰ふ。子の楚嗣ぐ。

ここに「敦の逆を作すに及び、撫は二千人を領して之に従ふ。敦敗れ、撫は嶽と俱に亡走す」とあるのは、『晋書』卷六「明帝紀」の次の記述をいう。すなわち、

（太寧二年）秋七月壬申朔、敦遣其兄含及錢鳳、周撫、鄧岳等水陸五萬、至于南岸。温嶠移屯水北、燒朱雀桁、以挫其鋒。帝躬率六軍、出次南皇堂。至癸酉夜、募壯士、遣將軍段

秀、中軍司馬曹淠、左衛參軍陳嵩、鍾寅等。甲卒千人渡水、掩其未畢。平旦戰于越城、大破之、斬其前鋒將何康。王敦噴惋而死。

秋七月壬申朔、敦は其の兄の含及び錢鳳・周撫・鄧岳ら水陸五萬をして、南岸に至らしむ。温嶠は屯を水北に移し、朱雀桁を燒き、以て其の鋒を挫く。帝は躬ら六軍を率ゐ、出でて南皇堂に次る。癸酉の夜に至りて、壯士を募り、將軍段秀・中軍司馬曹淠・左衛參軍陳嵩・鍾寅らを遣はす。甲卒千人水を渡り、其の未だ畢らざるを掩ふ。平旦に越城に戰ひて、大いに之を破り、其の前鋒將何康を斬る。王敦は噴惋して死す。

のようである。

また、「石勒の將郭敬は騎を率ゐて撫を攻む。撫は守る能はず、領する所を率ゐて武昌に奔り、坐して官を免ぜらる」と見えるが、これは『晋書』卷七「成帝紀」に、

（咸和五年）秋八月、石勒僭即皇帝位、使其將郭敬寇襄陽。

南中郎將周撫退歸武昌。

秋八月、石勒 僭して皇帝の位に即き、其の將郭敬をして襄陽に寇せしむ。南中郎將周撫は退きて武昌に歸る。

とある記述と一致する。

また、周撫の本伝に「永和の初め、桓温は蜀を征し、撫を進めて梁州の漢中・巴西・梓潼・陰平四郡軍事を督せしめ、彭模に鎮す。撫は蜀の餘寇隗文・鄧定等を撃破し、偽尚書僕射の王誓・平南將軍の王潤を斬り、功を以て平西將軍に遷る」とあるのは、『晋書』卷八「穆帝紀」に、

（永和二年）十一月辛未、安西將軍桓温帥征虜將軍周撫、輔國將軍譙王無忌、建武將軍袁喬、伐蜀、拜表輒行。  
十一月辛未、安西將軍桓温は征虜將軍周撫・輔國將軍譙王無忌・建武將軍袁喬を帥めて、蜀を伐ち、拜表して輒ち行く。

とあることをいう。

これら『晋書』本伝および帝紀に見られる記述からは、王羲之と周撫との直接的な関わりを見ることはできない。しかし、そもそも周撫の父の訪は、安南將軍・梁州刺史となった人物で、王敦も一目置くほどの武人であった。撫も東晋になってからは王敦の部下となって重用された。後に王敦が謀反を起こした時に、撫は敦に従ったが、後に赦されて司徒王導の従事中郎となっている。このように、周撫は王敦に重用され、王導にも目をかけられるほどに王氏とは深く関わりがあった人物であり、当然のことながら羲之とも関わりがあったに違いないと思われる。

ところで、『世説新語』豪爽篇には、次のような話が伝えられている。

桓宣武平蜀、集參僚置酒於李勢殿。巴蜀縉紳、莫不來萃。桓既素有雄情爽氣、加爾日音調英發、叙古今成敗由人、存亡繫才。其狀磊落、一坐歎賞。既散、諸人追味餘言。于時尋陽周馥曰、「恨卿輩不見王大將軍」。

桓宣武 蜀を平らげ、參僚を集めて李勢の殿に置酒す。巴・蜀の縉紳、来り萃らざる莫し。桓は素より雄情爽氣有り、加ふるに爾の日は音調英發し、古今の成敗は人に由り、存亡は才に繫るを叙す。其の状磊落、一坐歎賞す。既に散じ、諸人は餘言を追味す。時に尋陽の周馥曰く、「恨むらくは卿が輩の王大將軍を見ざることを」と。

劉注に引く『晋中興書』には、

馥、周撫孫也。字湛隱。有將略、曾作敦掾。  
馥は、周撫の孫なり。字は湛隱。將略有りて、曾て敦の掾と作る。

とあり、ここに「周撫」の名が見えている。『世説新語』本文に見える「李勢」とは、後蜀最後の君主で、その悪政のために内外

の信望を失った。そこで桓温は穆帝の永和二年に、周撫・譙王無忌・袁喬らを率いて、その討伐に向かい出向いた。このことは先に挙げた『晋書』穆帝紀の記述と一致する。

その後、桓温は參軍の孫盛と周楚（周撫の子）を輜重に留めてその地を守らせ、みずからは成都に向かい李勢の軍を破った。なお、桓温の蜀を討伐することに関しては、『世説新語』識鑿篇にも次のように見えている。

桓公將伐蜀。在事諸賢、咸以李勢在蜀久、承藉累葉。且形扼上流三峽、未易可克。唯劉尹云、「伊必能克蜀。觀其蒲博、不必得、則不為」。

桓公、將に蜀を伐たんとす。在事の諸賢、咸<sup>み</sup>な以<sup>おも</sup>へらく、「李勢は蜀に在ること久しく、承藉累葉なり。且つ形は上流三峽に扼り、未だ易く克つ可からず」と。唯だ劉尹云ふ、「伊は必ず能く蜀に克たん。其の蒲博するを觀るに、必ず得ざれば、則ち為さず」と。

以上、『晋書』『世説新語』等によって周撫と王羲之との関わりを見ていったが、次に王羲之が周撫に宛てた書翰によって、二人の関係を探ってみたい。

### 周撫への書翰

益州刺史の周撫に宛てた書翰としては、次のようなものがある。<sup>②</sup>

省足下別疏、具彼土山川諸奇。楊雄蜀都、左太冲三都、殊為不備悉。彼故為多奇、益令其游目意足也。可得果、当告卿求迎。少人足耳。至時示意。遲此期、真以日為歲。想足下鎮彼土、未有動理耳。要欲及卿在彼、登汶嶺峩眉而旋。實不朽之盛事。但言此、心以馳於彼矣。

（『右軍』七・『淳化』三・『二王』上）

足下の別疏を省るに、彼の土の山川諸奇を具<sup>つ</sup>ぶす。楊雄の「蜀都」、左太冲の「三都」も、殊に備悉ならずと為す。彼<sup>か</sup>は故<sup>もと</sup>より奇多しと為せば、益ます其の游目の意をして足らしめん。果たすを得可くんば、当<sup>まさ</sup>に卿に告げて迎へを求むべし。少人にて足るのみ。時に至らば意を示さん。此の期を遲<sup>ま</sup>つは、真に日を以て歳と為す。想ふに足下は彼土に鎮し、未だ動く理有らざるのみ。要<sup>かな</sup>らず卿の彼<sup>か</sup>に在るに及び、汶嶺<sup>ぶんれい</sup>・峩眉<sup>いがび</sup>に登りて旋らんと欲す。実に不朽の盛事なり。但<sup>た</sup>だ此<sup>これ</sup>を言へば、心は以<sup>す</sup>に彼<sup>か</sup>に馳す。

「あなたからの別疏を見ますに、そちらの山川や珍しい産物な

どが詳しく書かれていました。これではあの楊雄の『蜀都の賦』や左思の『三都の賦』も、十分なものとは言えません。そちらはもとより奇勝が多いので、いよいよこの『目を遊ばせる人』の思いを満足させてくれることでしょう。行けるようになったら、あなたに連絡して迎える者をよこすように頼みます。少しの人数で十分です。その時になったらお知らせします。その日が来るのを、まことに一日が一年のような思いで待っております。思いますに、あなたはそちらを治めてられて、まだ転勤されることもないでしょうが、どうかあなたがそちらにいらつしやる間に、汶嶺・峩眉の山々に登ってきたいものです。このことは本当に『不朽の盛事』というものです。このようなことを口にしただけで、心はもはや彼の地に馳せております」という内容の手紙である。ここにある「別疏」とは、手紙に同封した別の手紙をいう。「不朽の盛事」は、魏の文帝の「典論論文」に「蓋し文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」とあるのに拠つたもの。義之は「游目の楽しみ」すなわち景勝地を自分の目で楽しむということを好んでいた。益州刺史であった周撫が任地にある間に、是非とも彼の地に行きたいという義之の思いがよく分かる書翰である。

往在成都、見諸葛顛。曾具問蜀中事、云成都城池門屋樓觀、皆是秦時司馬錯所修。令人遠想慨然。為爾不。信一一示。為欲  
広異聞。

（『右軍』一六・『二王』上）  
往に都に在りて、諸葛顛に見ゆ。曾ち具に蜀中の事を問ふに、成都の城池・門屋・樓觀は、皆な是れ秦の時司馬錯の修めし所なりと云ふ。人をして想ひを遠くして慨然たらしむ。爾りと為すや不や。信もて一一に示せ。為に異聞を広くせんと欲す。

「以前、都で諸葛顛に会いました。そこで蜀のことを色々と尋ねましたところ、成都の城池・門屋・樓觀は、すべて秦の時に司馬錯が作ったものだ、とのことでした。本当にその通りなのでしょうか。お手紙で詳しくお教え下さい。見聞を広くしたいと想いますので」。ここにも「遊目」を楽しむ人としての義之の思いを見ることができるところで、こうした彼の地の風物について尋ねたり答えたりする書翰として西晋の陸雲（二六二〜三〇三）が、その兄の陸機に宛てた次のようなものがある。

一日案行、并視曹公器物。牀薦席具、寒夏被七枚。介幘如呉幘、平天冠遠遊冠具在。嚴器方七八寸、高四寸餘、中無鬲、如吳小人嚴具狀。刷膩尙可識。踈枇別齒織綆皆在。拭目黃絮二在。垢垢黒目淚所沾汚。手衣臥籠挽蒲棋局書籍亦在。奏

案大小五枚書車。又作歧案、以臥視書。扇如吳扇、要扇亦在。書箱想兄識彦高書箱、甚似之。筆亦如吳筆、硯亦爾。書刀五枚。瑠璃筆一枚、所希聞、景初三年七月、劉婕妤析之。……

## 〔與平原書〕其一

一日 案行し、曹公の器物を并せ視る。牀・薦席は具はり、寒夏の被七枚あり。介幘は吳幘の如く、平天冠・遠遊冠具な在り。嚴器は方七八寸、高さ四寸餘、中に髡無く、吳の小人の嚴具の状の如し。刷賦する処は尚ほ識る可し。踈枇・剔齒・織紵は皆な在り。拭目の黄絮二つ在り。垢垢として黒きは目涙の沾洿する所なり。手衣・臥籠・挽蒲・棋局・書箱も亦た在り。奏案大小五枚・書車あり。又た歧案を作り、以て臥して書を視る。扇は吳扇の如く、要扇も亦た在り。書箱は想ふに兄の識る彦高の書箱、甚だ之に似たり。筆も亦た吳筆の如く、硯も亦た爾り。書刀五枚あり。瑠璃筆一枚、希聞する所は、景初三年七月、劉婕妤之を析くと。……

この書翰は、陸雲が曹操の遺跡を訪れて、その状況を兄の陸機に報告したものである。同様の書翰が他にも二条ある。また、陸機には「弔魏武帝文」（『文選』卷六十）という作品があり、その序に「元康八年、機は初めて臺郎を以て、出でて著作に補せられ、秘閣に遊んで、魏の武帝の遺令を見る云々」とあり、

恐らく此の書翰も元康八年（二九八）頃に書かれたものであろうか。或いは陸機が「弔魏武帝文」を書くにあたって、雲を取材に行かせたのかも知れない。<sup>6)</sup>

続いて王羲之の周撫宛ての書翰を見てみよう。

云譙周有孫、高尚不出。今為所在。其人以副此志不。令人依依。足下具示。嚴君平司馬相如楊子雲、皆有後否。

〔右軍〕一〇・『淳化』三・『二王』上

云ふ、譙周に孫有り、高尚にして出でずと。今、為た所在は。其の人、以て此の志に副ふこと有りや不や。人をして依依たらしむ。足下、具に示せよ。嚴君平・司馬相如・楊子雲は、皆な後有りや否や。

「譙周には孫があり、高尚の志を持して出仕しない、と言うことです。今、いったいどこにいるのでしょうか。私はたいへん心を惹かれます。どうか詳しくお知らせ下さい。嚴君平・司馬相如・楊子雲は、その子孫がまだ生きているのですか」という内容である。「譙周」は、『三国志』卷四二「蜀書」譙周伝に、「周の長子は熙。熙の子は秀、字は元彦。『晋陽秋』に曰く、秀、性は清静にして、世に交はらず。將に大乱あらんとするを知るや、予め人事を絶ち、從兄弟及び諸もろの親里と、与に相ひ見はず。



云々」とある。また、「嚴君平」は、名は遵で、君平はその字である。卜筮を事とし、楊雄が君平に学んだ。蜀の成都の人である。「司馬相如」（前一七九〜一一七）は字は長卿で、漢代の文人。蜀の成都の人。「楊子雲」（前五三〜後一八）も蜀の成都の人。「子雲」は字で、名は雄。

益州刺史であった周撫に、かつて蜀で活躍した文人達の子孫の消息をたずねているのである。羲之は蜀の景勝地のみならず、歴史に関わった人物達にも興味を持っていたのである。

朱處仁、今何在。往得其書信、遂不敢答。今因足下答其書。可令必達。

〔「右軍」一二・『淳化』四・『二王』中〕

朱處仁は、今何いづくに在りや。往まに其の書信を得たるも、遂に答へを取らず。今、足下に因りて其の書に答ふ。必ず達せしむ可し。

「朱處仁は、今どこにいますのでしうか。以前、彼から手紙をもらったのですが、返事を出さないままでおります。今、あなたにことづけて返事をしようと思います。必ず届けて下さい」。ここにある「朱處仁」とは、龍驤將軍であった朱熹のことと思われる。先に挙げた『晋書』周撫伝には「初め、賢は李雄の国師と為り、左道を以て百姓を惑はし、人多く之に事ふ。賁 遂に衆一

萬有り。撫は龍驤將軍朱熹と擊破して之を斬り、功を以て爵を建城県公に進めらる」とあるように、朱熹は周撫といっしょに益州を平定した人物である。「處仁」とは、おそらく朱熹の字であるう。

省別、具足下小大問、為慰。多分張。念足下懸情。武昌諸子、亦多遠宦。足下兼懷。並數問不。老婦頃疾篤、救命恒憂慮。餘粗平安。知足下情至。

〔「右軍」一三・『淳化』三〕

別を省みて、足下の小大の問を具つにし、慰めと為す。分張するもの多し。足下の懸情を念ふ。武昌の諸子も、亦た遠宦するもの多し。足下兼ねて懷おもはん。並びに數しばしばに問ありや不や。老婦は頃この疾やまひ篤く、救命するも恒に憂慮す。餘は粗まば平安なり。足下の情の至れるを知る。

「別状を拝見して、お宅の皆様の様子がよくわかり、安心いたしました。地方に出ておられる方が多く、さぞかしご心配なことと思います。かつての武昌の仲間も、遠くに赴任している者が多く、あなたも会いたく思っておいでのことでしょう。皆さんからの便りはしばしばありますか。老妻は近ごろ病気が重く、祈禱をしてもらっておりますが、いつも憂慮しております。その他の者は、だいたい無事です。あなたのお心づくしを知り、うれしく

思っておりませぬ。この書翰を見れば、羲之と周撫とはかなり打ち解けた間柄であったことが想像される。

得足下旃罽胡桃菓二種、知足下至。戎鹽乃要也。是服食所須。知足下謂須服食。方回近之、未許吾此志。知我者希。此有成言。無緣見卿。以當一笑。

〔右軍〕九・『淳化』三・『二王』中

足下の旃罽・胡桃・菓二種を得て、足下の至りを知る。戎鹽は乃ち要なり。是れ服食の須ふる所なり。足下の服食を須ひんと謂ふを知る。方回は之に近きも、未だ吾が此の志を許さず。我を知る者は希なりと。此れ言を成す有り。卿を見るに縁無し。以て一笑に當てん。

「あなたからの旃罽・胡桃・菓二種を受け取り、あなたのお心づくしを知りました。戎鹽は大切なものです。服食には欠かせません。あなたも服食に関心を持たれていることを知りました。方回は服食のことに詳しいのですが、まだ私のこの思いを認めてくれません。『私を理解してくれる者は希である』とは、よく言ったものです。あなたにお目にかかるすべもありません。先ずはお笑いくぐさまで」。

この手紙にある「方回」とは、郁悝の字である。郁悝は郁鑒の子で曇の兄である。王羲之の妻の璿は鑒の娘であり、羲之の子の

献之は曇の娘の道茂を娶っている。「知我者希」は、『老子』第七十章に「我を知る者希なれば、則ち我は貴し」とあるのに拠ったもの。

ここに書かれている内容からも分かるように、羲之はかねてから服食養生に興味を懐いていた。この他にも羲之の書翰の中には、服食養生や薬方に関するものが多く見られる。

#### おわりに

以上、王羲之が周撫に宛てたと思われる幾つかの書翰を見てきたが、今日まで七百条近い数のものが残されている王羲之の書翰のうち、これらを合わせて十二条が確認される。蜀の地の風物や歴史、また服食や薬のことなどについて、羲之と周撫との間では、こうした親しい書翰のやりとりが行われていたようである。

ところで二人が亡くなった年、すなわち升平五年（三六一）に羲之から周撫に宛てたと思われる次のような書翰がある。

足下今年、政七十耶。知體氣常佳。此大慶也。想復勤加頤養。吾年垂耳順。推之人理、得爾以為厚幸。但恐前路軫欲逼耳。以爾、要欲一遊目汶領。非復常言。足下但當保護以俟此期。勿謂虛言。得果此緣、一段奇事也。

〔淳化〕四・『二王』上

足下は今年、政に七十なる耶。體氣の常に佳なるを知る。此れ大

慶なり。復た<sup>ま</sup>勲<sup>ねとら</sup>に頤養を加へんことを想ふ。吾は年耳順に垂<sup>なな</sup>んとす。之を人理に推すに、爾<sup>しか</sup>るを得たるは以て厚幸と為す。但だ前路の転<sup>うた</sup>た逼らんと欲るを恐るのみ。爾<sup>しか</sup>るを以て、一たび汝<sup>がん</sup>嶺に遊目せんと要欲<sup>ほつ</sup>す。復た常言に非ず。足下は但だ当に保護して、以て此の期<sup>とき</sup>を俟<sup>ま</sup>つべし。虚言と謂<sup>おも</sup>ふこと勿かれ。此の縁を果たすを得ば、一段の奇事なり。

すなわち、「あなたは今年、ちょうど七十になられるのでしよう。いつもお元気だということなので、たいへん喜んでおります。どうか更に十分に養生して下さい。私も耳順の年になろうとしております。人の世の道理からして、この年まで生きられたのはとても幸せなことと思います。ただ、行くさきが次第に迫っていることが気がかりでなりません。というわけで、ぜひ一度、汝嶺へ遊びに行きたいと思えます。口先だけのことではありません。あなたはお体を大切に、その時期が来るのを楽しみに待っていて下さい。嘘言<sup>うそ</sup>だと思つてはいけません。この事が果たせたならば、すばらしいことです」という内容のものである。

この時、義之は五十九歳、周撫は七十歳。書翰の中にも「之を人理に推すに」すなわち、人間の寿命から言えば、ともに長生きをしたことになる。老い先の短いことを気に掛けながらも、義之は周撫のいる蜀に出かけ汝嶺に登ってみたいという願いを懐いていたのであるが、結局この願いは叶えられることなく二人ともに

此の年に世を去つてしまふ。

義之よりも十一歳年上の周撫は、乱世の時代にあつて真に心を許すことのできる友人であつたことが、これらの書翰から分かるのではなからうか。

そもそも王義之の書翰は、「十七条」に代表されるように主として書の手本として大切にされてきた。しかし、そこに書かれた内容からは義之の普段の生活の状況や彼の思いなどを読み取ることができない。すなわち王義之の書翰は、歴史の記録では見ることのできない人間関係を我々に示してくれているのである。

【注】

- (1) 『中国学芸大事典』にも紹介されているように、王義之の生卒年には諸説がある。初版本の森野繁夫・佐藤利行『王義之全書翰』白帝社（昭和六十一年）では清・魯一同『右軍年譜』の説によって義之の生年を永嘉元年（三〇七）としたが、その後の調べによって六朝・梁の陶弘景『真誥』の記事に拠つて増補改訂版『王義之全書翰』では生年を太安二年（三〇三）に改めた。本稿では義之の生卒年を三〇三～三六一年として論を進めている。

- (2) テキストとして使用したのは、唐・張彦遠輯『右軍書記』（津逮秘書本『法書要録』所収）、清・乾隆三十四年勅輯

『淳化閣帖』（広雅書局刊『武英殿聚珍版』所収）、宋・許開撰『二王帖評釈』（『横山草堂叢書』所収）である。『右軍書記』については、宋・朱長文『墨池編』（康熙五十三年裔孫之勵就間堂刊本）所収のものと、明・王世貞『王氏書苑』（民国十一年上海泰東図書館用原刻本景印）所収のものを参照した。

(3) 「遊目」の語は、『楚辭』離騷に「忽ち反顧しては以て目を遊ばせ、將に往きて四荒を觀んとす」とあるのに拠るもの。広く遊覽することをいう。「遊目」の語は、羲之の書翰には、他にも以下のようなものに見えている。

知彼清晏歲豊。又所使有無一郷、故是名處。且山川形勢乃爾。何可以不遊目。（『淳化』四・『二王』上）

彼の清晏にして歳の豊かなるを知る。又た一無きを有らしむる所の郷にして、故より是れ名處なり。且つ山川の形勢は乃ち爾り。何ぞ以て遊目せざる可けんや。

頃猶小差。欲極遊目之娛、而吏卒守之。可歎耳。陽花果似小可。何日得卿諸人共賞。（『右軍』三三三）

頃ろ猶ほ小しく差ゆ。遊目の娛しみを極めんと欲するも、而も吏卒之を守る。歎く可きのみ。陽花は果たして小しく可なるが似し。何れの日にか卿ら諸人と共に賞するを得ん。

(4) 佐藤利行「王羲之と五石散」（『広島大学大学院文学研究科論集』第六十五巻）、森野繁夫『王羲之の伝論』（白帝社）二〇

六頁「服食養生」を参照。

(5) 佐藤利行『陸雲研究』（白帝社）を参照。

(6) 佐藤利行「陸機『弔魏武帝文』について」（『中国学論集』第十三号）を参照。

## 王羲之和周撫

佐藤利行

作為王羲之草書的珍品，《十七帖》久負盛名。據說這是寫給益州刺史周撫的信函。讓我們試看一則如下：

云譙周有孫，高尚不出。今為所在。其人以副此志不。令人依依。足下具示。嚴君平司馬相如楊子雲，皆有後否。

書中出現的“譙周”“嚴君平”“司馬相如”“楊子雲”皆為蜀地之人，從內容來看，也可以知道這的確是寫給周撫的信函。

本文就以《晉書》《世說新語》以及王羲之的信函作為資料，來考察一下兩人的關係。